満洲少年回想記

徳広貞夫

第一部　満洲帝国の落日

一　ソ連軍満洲侵攻・東部満洲

昭和二十年（一九四五年）八月九日（木曜日）

「おーい！　ソ連と戦争が始まったぞ！」

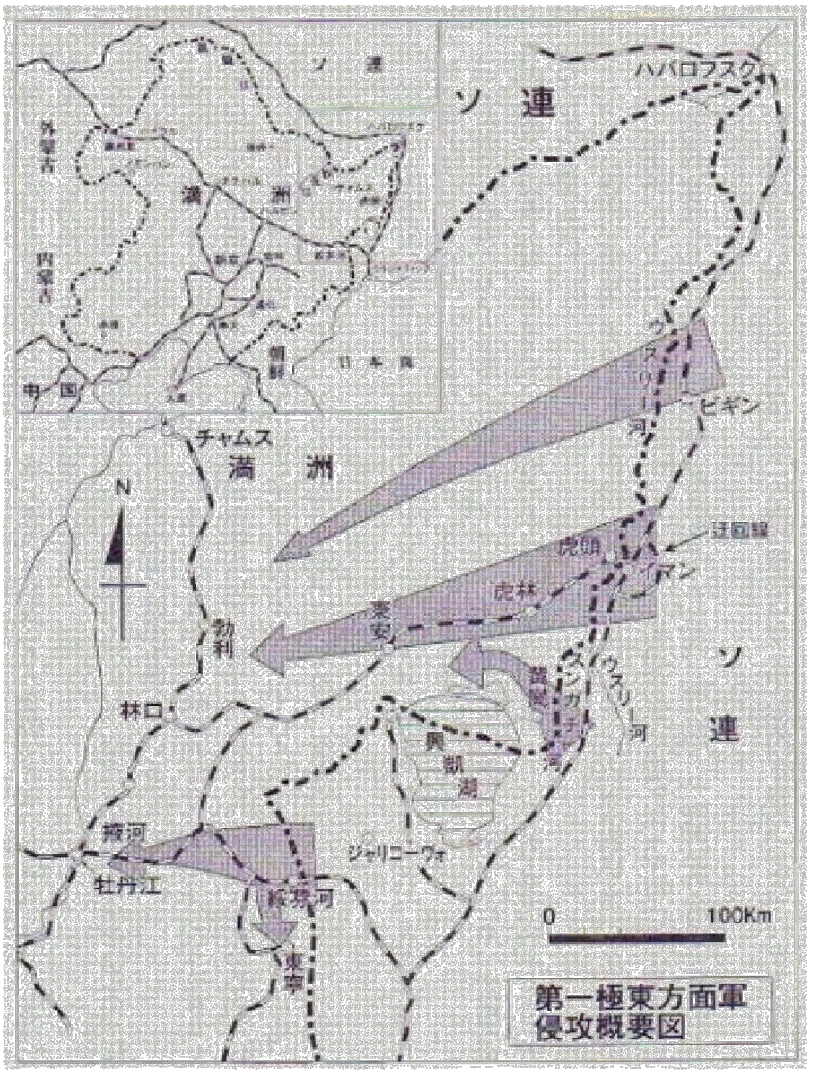
四年生の一人があわただしく、私たち一年生の室に飛び込んできた。

寝耳に水である。簡易ベッドで寝ていたわれわれは、緊急事態発生の報せに一斉にはね起きた。ソ連が満洲に攻め込んでくるなど全く予想していなかった。

ソ連軍進攻を伝達に来た先輩は、そのまま入り口近くのベッドにどっかと腰を下ろした。二十名ほどいた一年生は、寝ぼけ眼（まなこ）でその周りに集まった。

五時五十分の起床時間までには、まだかなりの時間があったが眠気はすっかり吹き飛んでいた。満

洲の夏は朝が早い。早暁とはいえ仮の寄宿舎になっていた元営林



『ソ連が満洲に侵攻した夏』(文藝春秋)より

局庁舎の二階の事務室は隅ずみまで薄っすらと明けていた。

「家の方は大丈夫かなあ？」

国境の生徒のだれかだろう。頭の中を不安がよぎったようだ。

星輝(せいき)中学校と呼ばれたこの学校は全寮制で、黒河(コッカ)や桂木斯(ジャムス)、綏芬河(スイフンガ)、東寧(トウネイ)といった満洲東部の国境付近からの在校生が大勢いた。

転勤や転属の多い関東軍の軍人や軍属の子弟のために、昭和十七年四月に満洲東部の牡丹江(ボタンコウ)市に創立されたばかりで、この時の四年生が第一期生であった。

『図説　満洲帝国　太平洋研戦争究会編』(河出書房新社)より

あれは入寮生活が始まって間もない四月はじめのこと。夕食後の自習時間に机についていると、

「ソ連が一方的に〝日ソ中立条約〟不延長を通告してきた！」

と、四年生が各部屋に伝達に回ってきた。

その時は一瞬、室内に緊張感が走ったが、条約が破棄されても「一年間の猶予期間がある」と、付け加えられたので、いつしか切迫感が薄らいでいったのを覚えている。

寮では新聞やラジオに接する機会はないし、学校の朝礼などでもソ連軍の動向について特に触れられることはなかった。

日々の戦局は対アメリカに関するもので、ソ連に対する関心はほとんどなく、意識する敵国はもっぱらアメリカ一辺倒だった。

予兆といえば、これまで起居していた学校の寮が関東軍第五部隊の野戦病院に提供されることになり、七月末にこの庁舎に転居させられたことだったかもしれない。

今になって思い起こせば、市内には立派な陸軍病院があるのに、なぜ学校の寮が接収されることになったのか。時局の要請ということだから、関東軍では近いうちに日ソ開戦必至とにらんでいたのだろう。

当時の学生寮

学校の寮は、最近完成されたばかりの三棟各二階建てで、生徒居室は五十室約四百人まで収容可能で各室にスチームも入っていた。当時としては近代設備の整った建物だった。

一室八名で、各室に三年生（二期生）の室長が配属されていた。それが、この庁舎に引っ越してからは、一年生だけ二十名の部屋割りとなり、先輩に気を遣うこともなく、のびのびと生活できるようになり、喜んでいたところである。

旧牡丹江陸軍病院　1991年9月 二期生撮影

寝室は営林署の事務室で、部屋いっぱいベッドが並べられていた。事務室の床に布団を敷いて寝るわけにいかないからだろう。当初は夜中にベッドから転落して目を覚ます奴がいたが、そのうち寝相に気をつけるようになったのか転落者はいなくなったようだ。それにしても簡易ベッドとはいえ一度に生徒数だけ手当できたのは軍の威力だろうか。

昭和二十年に入ってからのわが国の戦局は、三月に硫黄島、六月には沖縄島と玉砕が相次ぎ、いよいよ米軍との本土決戦が叫ばれるようになっていた。

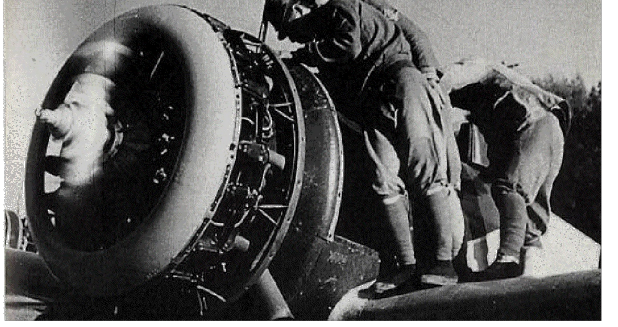
満州飛行機製作所で働く学徒挺身隊。

そんな状態だから、私たちの頭の中は、極東ソ連軍の兵

力や配置、装備などについての情報は空白にひとしかった。

牡丹江市からソ連との国境まで最短距離で１５０キロメートル、飛行機なら二〇分とかからないという事実すら認識していなかった。

例年なら夏休みに入り、それぞれわが家に帰省しているところだが、この年は夏休み返上となり、一期生の四年生は機甲班（自動車運転教習班）の二十人を残し、満洲西部の満洲航空平台飛行機工場へ、二、三年生は開拓団へ勤労動員で出かけていた。

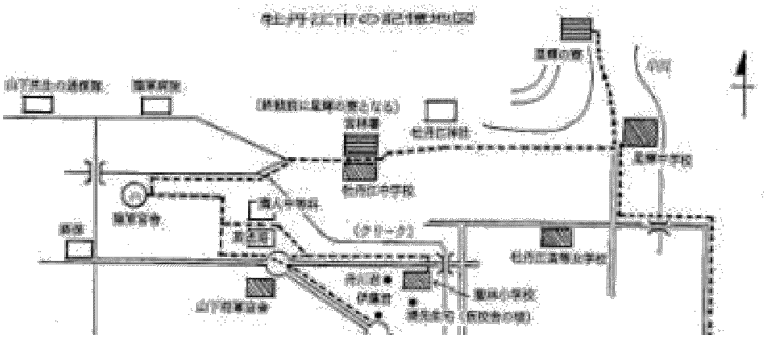


『満洲の記録 満映フィルムに映された満洲』(集英社)より

『満洲の記録 満映フィルムに映された満洲』(集英社)より

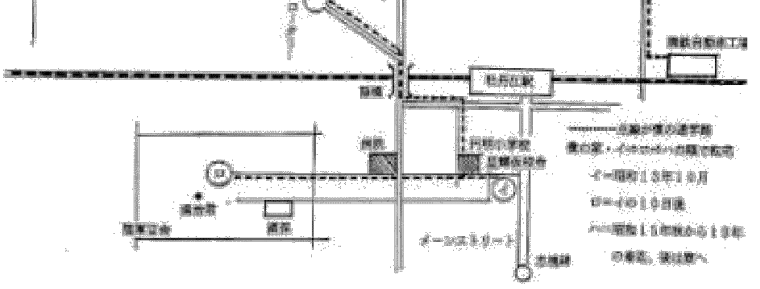
ベッドに腰を据えた四年生の周りを囲んだ私たちは、その口から国境付近の戦況について、もっと詳しい情報がもれてこないか、すがる思いで見つめた。

当直の先生に伝達を命じられただけの先輩に、それを求めるのは無理な話だったが



、不安の色を隠せない一年生たちを勇気づける必要を感じたのか、

「満洲には日本軍の精鋭を誇〝無敵関東軍〟百万が配置されているんだぞ。そうたやすくソ連軍なんかにやられてたまるか！」



（星輝中1期生　満尾文雄氏作成）

「ソ連が一方的に不意打ちをかけてきたんだから、緒戦は劣勢に立つかもしれんが、必ず戦局はばん回するさ」

なんの根拠も裏付けもない希望的観測に過ぎないが、その威勢のよい言葉に一年生たちは次第に勇気づけられ、不安もしだいに薄らいでいったようだ。

九五式軽戦車

装甲が薄く、ソ連軍戦車相手には非力すぎた

機甲班の一員であるこの先輩は、自分の言葉に陶酔し、次第に士気が高ぶってきたのか、

「おれは機甲班で自動車の運転を習っているから、戦車だって運転は同じのはずだ。おれも戦車で闘わしてくれんかなあ」

今すぐにでも志願したい気持ちに駆られてきたようだった。

機甲訓練生は、寮から営林署に移転するとき、訓練用のトラックのハンドルを握り、布団や机など大型荷物を積み、雨でぬかるんだ坂道を難儀しながらでも搬送し終えたから、運転にはかなり自信をつけていたようである。

私たちもソ連兵と一戦交えてみたい衝動に駆られ、第一線に出て戦う可能性のある、この機甲班生を羨望の目で見つめた。

「でも無敵関東軍だ、ひとたまりもなくソ連軍をやっつけてしまうから、そんな機会はこないだろうなあ」

残念そうな口ぶりで、そう言った。

室内の空気は、いつしか関東軍の精鋭部隊が、ソ連軍を満洲から撃退しているだろうと、勝手な結論に落ち着き、口々にそれを残念がった。

とはいえ、国境から来ている連中の不安は、完全に払拭されたかどうか。

私の場合は一年前まで、東満国境のひと山越えればソ連領と言われた石門子（セキモンシ）という僻地に住んでいたが、昨年秋、父の転勤で牡丹江近郊の海林（ハイリン）に越していたので、国境の連中には悪いが「ああよかった」と、内心ほっとしていた。

その一方で、昨年十月まで同地の国民学校で一緒だった学童たちは、今ごろどうしているだろう、全

員無事だろうかと、気持ちはそちらに動いていた。

ほぼ一年しか在籍しなかったが、石門子を離れる日は全校総出の見送りだった。本間校長と歩兵部隊派遣の三浦先生に引率された十数人の学童が、東寧駅行きの軍用トラックの荷台に乗った私にいつまでも手を振ってくれた、そのときの情景と皆の顔が次々目に浮かんできた。

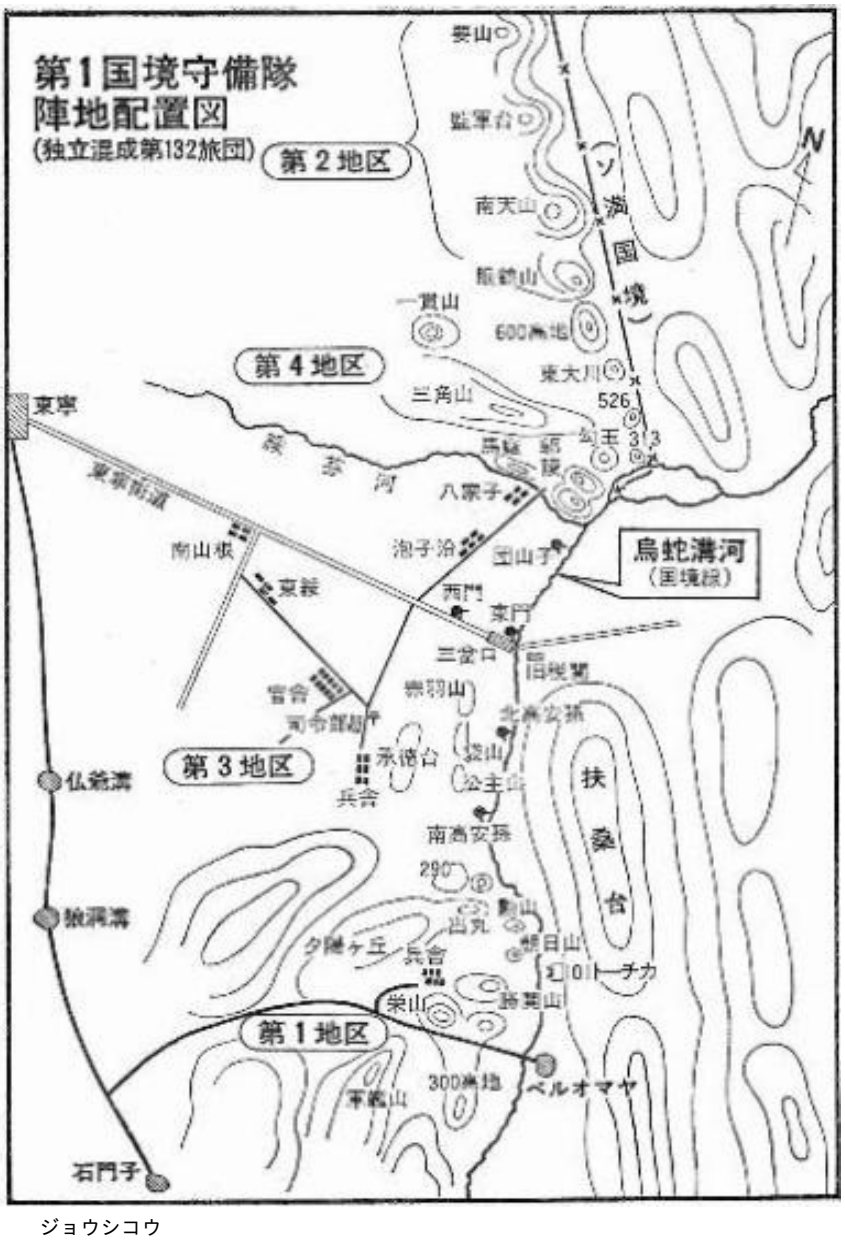
（『戦記クラシックス　満州国の最期』太平洋戦争研究会編・新人物往来社）

私の頭の中には、石門子は歩兵、砲兵、山砲の三部隊の駐屯地だったイメージが残っており、おそらくソ連軍の攻撃から全員守られているに違いないという安易な思いがあった。

　後年、同地区に関する戦記を読むと、現実は厳しいものだった。

石門子駐屯の部隊はすでに南方や満洲の他の国境に転出。昭和二十年七月に新たに編成された挺身大隊（三個中隊、約千人）が駐屯するのみ。

しかも、ソ連軍が侵攻した八月九日の朝には、旅団司令部からの配属命令で挺身大隊のうち第一、第二中隊を

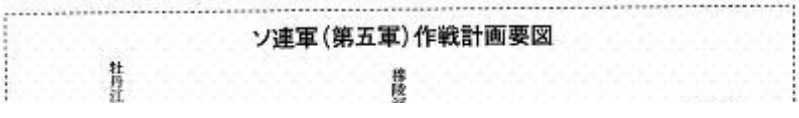


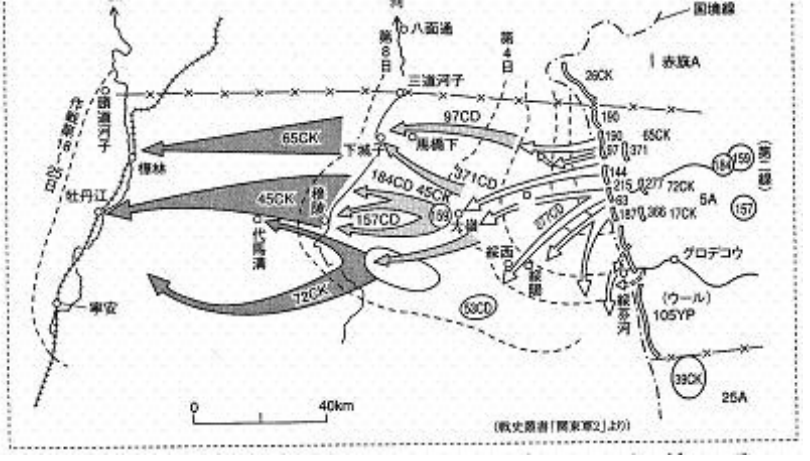
後方の防衛を固めるため 城子溝(ジョウシコウ) まで後退させ、残りの第三中隊は８キロ北方の永久要塞、勝鬨山陣地に斬り込み隊として抽出された。

石門子には一個小隊を守備のために残したが侵入したソ連軍の大部隊とは戦闘不能なので、その日の午後には後方へ転進している。『最後の関東軍～勝どきの旗のもとに～』（佐藤和正著　白金書房）より

当時の満洲の体験を収録した『秘録大東亜戦史 満洲篇』（富士書苑、昭和二九年六月二九日発行）の中から、八月九日の牡丹江市の様子についての記述のある「闘わざる覆面軍」（毎日新聞　北崎学著）と「歴史の足音」（朝日新聞　福沢卯介著）から、該当する部分を抜き書きしてみる。

「闘わざる覆面軍」より





それは早朝五時、寝室の電話のベルがけたたましく鳴りひびいた。受話器をはずすと同時に、

「大変だ、大変だ、はじまったぞッ」

「何だって？」

私はまだ夢心地であった。

「けさ 綏芬(スイフン) 河(ガ)の線でソ連が攻め込んできたんだ。目下激戦中だ」

電話の主が、軍関係の真面目な友人とわかると、私はがばと布団を蹴って支局の事務室に急いだ。

まずラジオのスイッチをいれて、特務機関を呼び出した。「ほんとうらしいな。いま非常呼集をかけているところだ。昨夜は、新京とハルピンに飛行機があらわれている」

と特務機関の本尊さえ、不意を衝かれた形であった。（中略）

綏芬河にもソ連軍が侵攻してきた

『満洲国の最期 太平洋研究会編』(新人物往来社)より

五部隊を呼び出した。参謀長も作戦参謀もいない。交換台の兵隊は至極落ちついた感じだった。

「戦争がはじまりましたね」

とさぐりをいれると、

「ええ」

と気のない返事をして、

「情報参謀殿がおられます」

という。さっそくつないでもらう。

「どうです、自信がありますか」

こんな風に私はたたみかけた。

「電話では困るんだがな。ともかく忙しいのだ」

「すぐにそちらに出かけます」

「いや、こられても会えない。まあ元気でやって下さい」

日頃したしい仲でも、さすがこの日はおもむきがちがっていた。元気でやってくれという意味は、かねての計画に従って軍は敦化(トンカ)に退避するのだな、と直感した。

急いで寝室にとって返して身支度をしていると、隣組の若い者が、調子はずれな声で空襲警報を伝達していた。どこの家でもまだ 安逸(あんいつ) な夢を追っているらしく、若者はいらいらした表情で、

「ソ連が攻めこんで来たんです。本当ですよ」

とつけくわえていた。あちこちの窓がひらいて、何を人騒がせな、といった寝呆けた顔をつき出している。

「皆様、重大ニュースを申し上げます。今朝ソ連は卑怯

牡丹江市円明街

にも突如として、満洲国を攻撃してまいりました。ソ連は日ソ中立条約を一方的にじゅうりんし、不法にも全国境からわが国に侵入を開始しました。しかしわれには関東軍の精鋭百万あり、全軍の志気は極めて旺盛、目下前線では激戦を展開、ソ連軍を撃退中であります。国民はわが関東軍を信頼して、すべてを軍へ、前線へ……」

ラジオががなりたてる。

ひとびとはやぶから棒の重大ニュースをただ呆然と聞きとがめ、急には心がまえが出来ぬようであった。

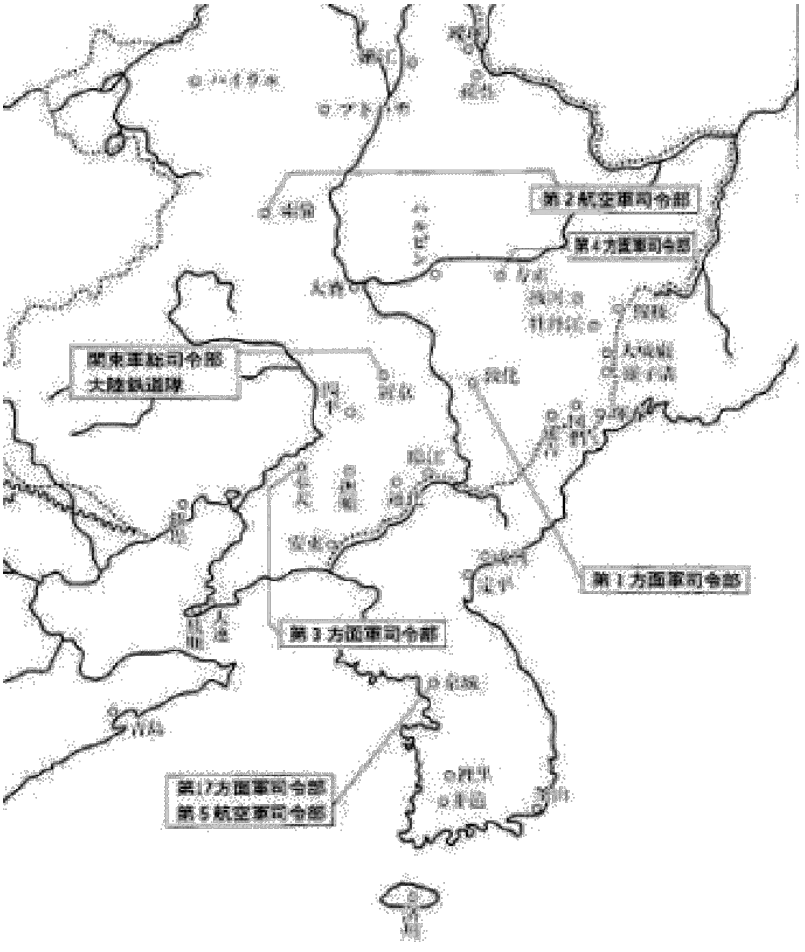
それもそのはずで、一般邦人はこの期（ご）に及ぶまで、ただの一回も日ソ危機を知らされていなかったのである。日ソ関係はこのままそっとしておきたいという希望的な考えから、むしろ太平洋戦争の危機に満洲もそのままつながるものとされていた。

ソ連と目と鼻のこの牡丹江の国境地帯においてさえ、防空訓練の仮想的はアメリカのＢ29であったのだ。ソ連の不意打ちは、文字どおり意表外であった。

（略）

空はどんより曇って牡丹江に覆いかぶさっている。いまにも雨を呼ぶようで、むんむんむし暑い。

「ラジオは本当でしょうかね」



関東軍の最終配置略図

『日本帝国最期の日』(新人物往来社)より

　と不承不承に、防空服装した隣組の人が集まってきた。

「本当らしいです」と私はこたえた。

答えながら、これからわずか百キロ、飛行機なら二〇分とかからぬ真向こうの国境で、いま血なまぐさい激戦が展開されているとはどうしても思えなかった。

　正午ごろになると、市民は虚脱状態からぬけでたようであった。隣組の回覧板は、

軍はあくまで牡丹江を死守するから各人は各自の職場を死守せよ」という意味を伝えてきた。前線の戦況は一切発表されなかった。

五部隊はその日のうちに敦化(トンカ)に異動したらしかった。

「歴史の足音」より

八月九日の朝、私はふと、けたたましい電話のベルで眠りをさまされた。長い間の記者生活で手は無意識に受話器を握っていた。

ソ聯対日宣戰布告

東西から國境を侵犯
滿洲國内へ攻撃開始
北滿北鮮へ分散空襲

我方自衛の邀撃戰展開

ソ聯兵力逐次增强
朝鮮樺太國境侵犯
日本海上で十四機撃墜

敵機動部隊再び近接

「おい、とうとう始まったぞ」

「なにが？」

「ソ連だ」

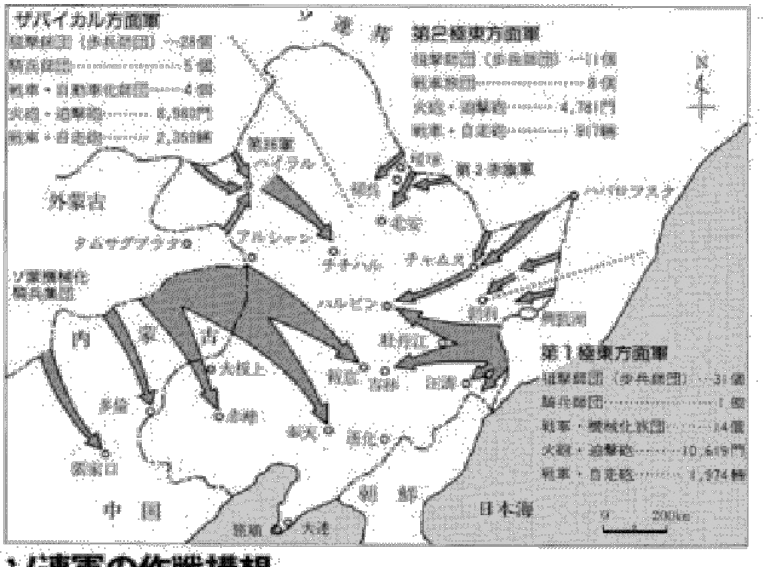
Ｋの叩きつけるような大きな声、瞬間ピリッと私の頭のシンは慄えた。

「そうか、状況は？」

「詳細は判らない。国境線は全面的に突破されたらしい」

私は受話器をもったまま崩折れるように床にすわりこんだ。（中略）

私たちはいろいろな状況からソ連進撃は十月だと観測していたのだ。



ソ連軍の作戦構想

ヨシフ・スターリン。1941年人民委員会議長（首相）に就任し、第2次世界大戦でナチス・ドイツに対する祖国防衛戦争を指導し、勝利へ導く。

敗走する日本軍を追って街に入ってきたソ連軍戦車。

「満州国民」を守れず一夜で崩壊した関東軍

『写説』満洲 太平洋研究会編』(ビジネス社)より

時計をみると午前四時四十五分、私は従軍服に着かえて玄関を飛び出した。（中略）

私は[1]東満総省公署に飛び込んだ。ここでは非常呼集であわてふためいて駈けつけたひとたちで混然雑然、少数の満系官吏が一ところに集まってなにかボソボソ話合っている。これからただちに、かねて用意の地下本部に移り、非常勤務につくという。

この地下本部は、牡丹江神社の裏山をくり抜いてペトンで固めた永久陣地で、市内の各機関や市民を収容し一ヵ年分の食糧も備蓄しているなどと伝えられていたものだが、事実はちっぽけなもので主要機関がはいれば一杯、記者諸君は国策通信、満洲国通信社以外収容できないという。特務機関にも立ち寄ったが、ここも平素の豪語もどこえやら誰も口をきくものもない。

既に撤収工作は進められている。私は毎日新聞の北崎君と連絡をとった。同君も、彼等と行をともにすることはできなくて独自の行動をとり、なんとか早く南に下ろうという、単身できている同君は身軽だが、私は家族をかかえているので。そう軽々は動けない。

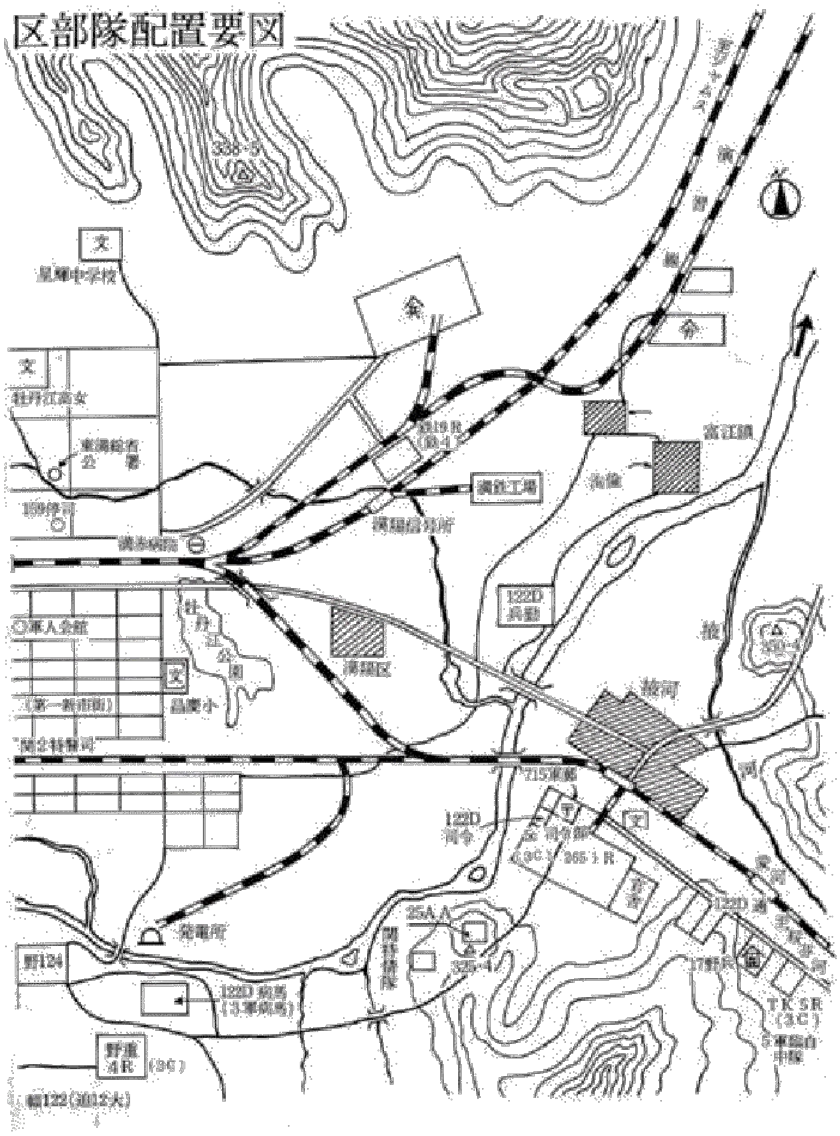
私が支局にひきかえしたころは、市民もソ連参戦をしって街は大きく揺れていた。

どの顔も血の気がない。不安、混乱、ただ頼むはかつて無敵を呼号した関東軍の精鋭の抗戦のみ。

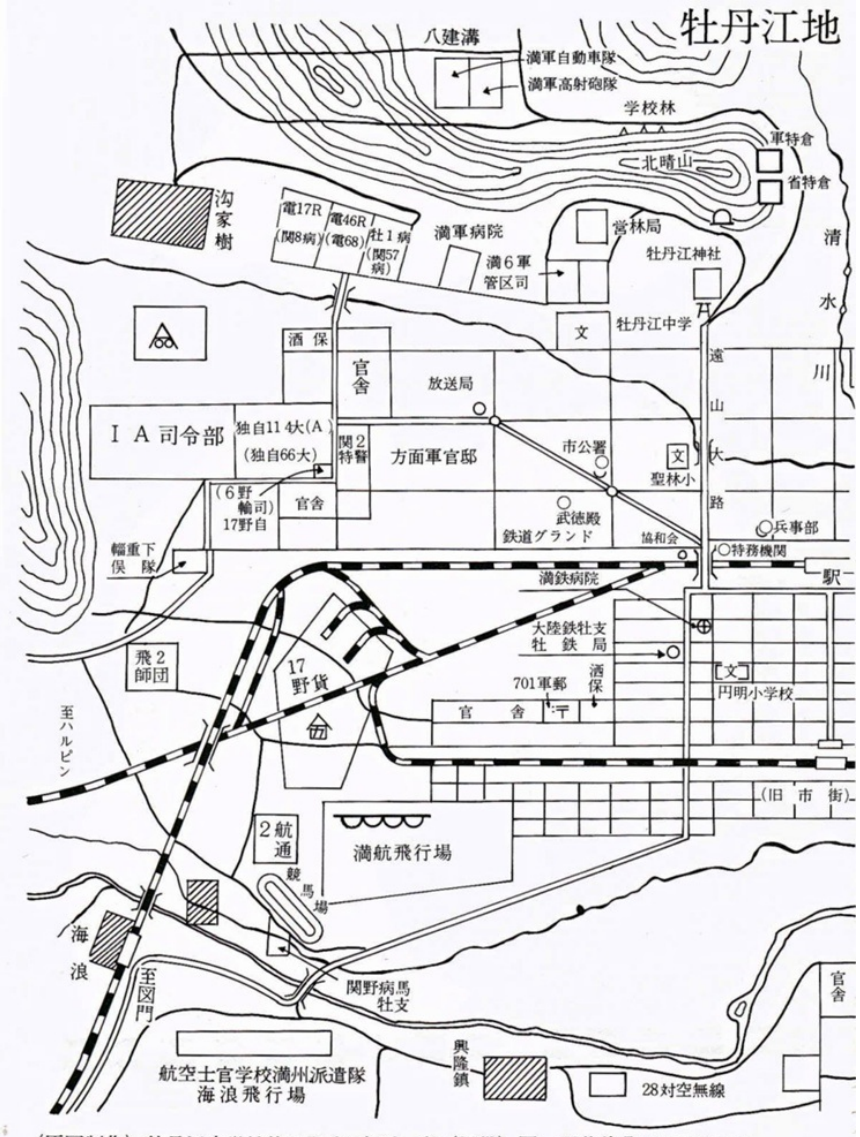
だが私はしっている。牡丹江周辺には飛行機一機高射砲一門さえないのだ。兵隊は十九年秋からこの年の春にかけぞくぞく招集、一応の数だけは揃えたが、小銃さえ完全に渡っていないのだ。

私は一通りの情報を集めて記事にまとめて、電話で新京（今の長春）にある満洲総局へ流した。（略）夕方ごろから雨になった。

私はかねてからソ軍侵入と同時に第一方面軍は、通化省の山地帯に撤収、ここで最後の抗戦をつづけるということは承知していた。いよいよ各部隊に撤収命令は発せられたのだ。（中略）



『俘虜追想記』清水豊吉著(北見文化連盟発行)より

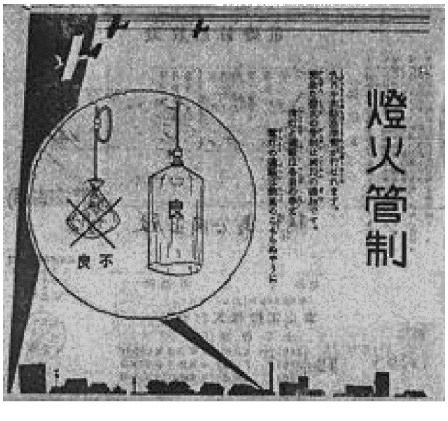


〈原図制作〉牡丹江中学校第５期生 宮腰　孝〈提供〉同・照井伸興（３枚共同じ）

牡丹江の、七万余の在留邦人の防衛は、いったい誰がやってくれるというのだ。木銃一挺と日本刀を腰にした在郷軍人と、ついさき程応召になった、完全武装をもたない老兵が主力という守備隊のみで戦えというのか。

夜にはいるとともに雨脚ははげしさを増していった。[2]全市灯火管制にはいり漆黒の闇だ。

この年二月応召、東安の通信隊に入隊した支局の渡辺礼輔君から電話があった。今駅前の大和ホテルにいるという。私は泥濘（でいねい）の道に、ともすれば足をとられ勝ちの真暗い街をぬって、大和ホテルに急いだ。



『戦争とこどもたち』(日本図書センター)

私たちはホテルの一室で冷酒をくみ別盃を重ねた。お互い再会を期せられないだろうが、頑張るだけ頑張ろう。私は渡辺君の手を堅く握った。目頭がじーんとして熱いものがこみあげてきた。

突然けたたましいサイレンが鳴り響いた。「敵機五機、液河（えきが）上空に侵入」というのだ。

私は同君と別れて家路を急いだ。雨は依然としてやまず、風さえ加わってきた。家へ帰ってみると、液河空襲はまったくのデマと

分かった。

注記１【東満総省】満州国政府は、東満（牡丹江省、東安省、間島省の三省）地区の行政経済の中心地である牡丹江市に、国境地帯の特殊性にそなえて東満総省を設置した。省長五十子（いらこ）巻三。

注記２【【灯火管制】戦時下に、夜間の空襲などに備え、灯りを制限すること。灯火管制を行わない場合、敵機から都市の位置がはっきりと視認できるようになり、精度の高い空襲が行えるようになるため。方法として窓をふさいだり、照明に覆いをつけたりした。

張り子の虎を

午前四時半頃、「全員食堂に集合！」、突然、非常呼集がかかった。

食堂に集まると、勤労動員に出かけていた三年生、二年生たちが前夜八時過ぎに帰ってきていたので、昨日までとは打って変わって騒然としていた。

假寮当時の食堂

彼らは六月に入って国境付近の開拓団に援農動員されていた。それが、全員ソ連侵攻前夜〝帰牡（牡丹江）シ得タルハ蓋（けだ）シ神意ニヨルモノト言ウベシ〟と、本校教頭は報告書に記述しているが、もう一日延びていたらどうなっていたことか。学校の教職員たちは、ほっと胸をなで下ろしたことだろう。

整列した寮生を前に、退役陸軍大佐の副寮長が、緊張した表情で両手を後ろに組み「寮生諸君、本日未明、ソ連軍が日ソ中立条約を破棄して満洲国内に五、六カ所から越境、侵攻を開始してきた。朝食後、登校して宇高（うたか）校長（寮長兼務、退役陸軍少将）の説明、指示を待つこと、以上解散」

この日の学校での出来事はほとんど覚えていないが、座学はなかったと記憶する。

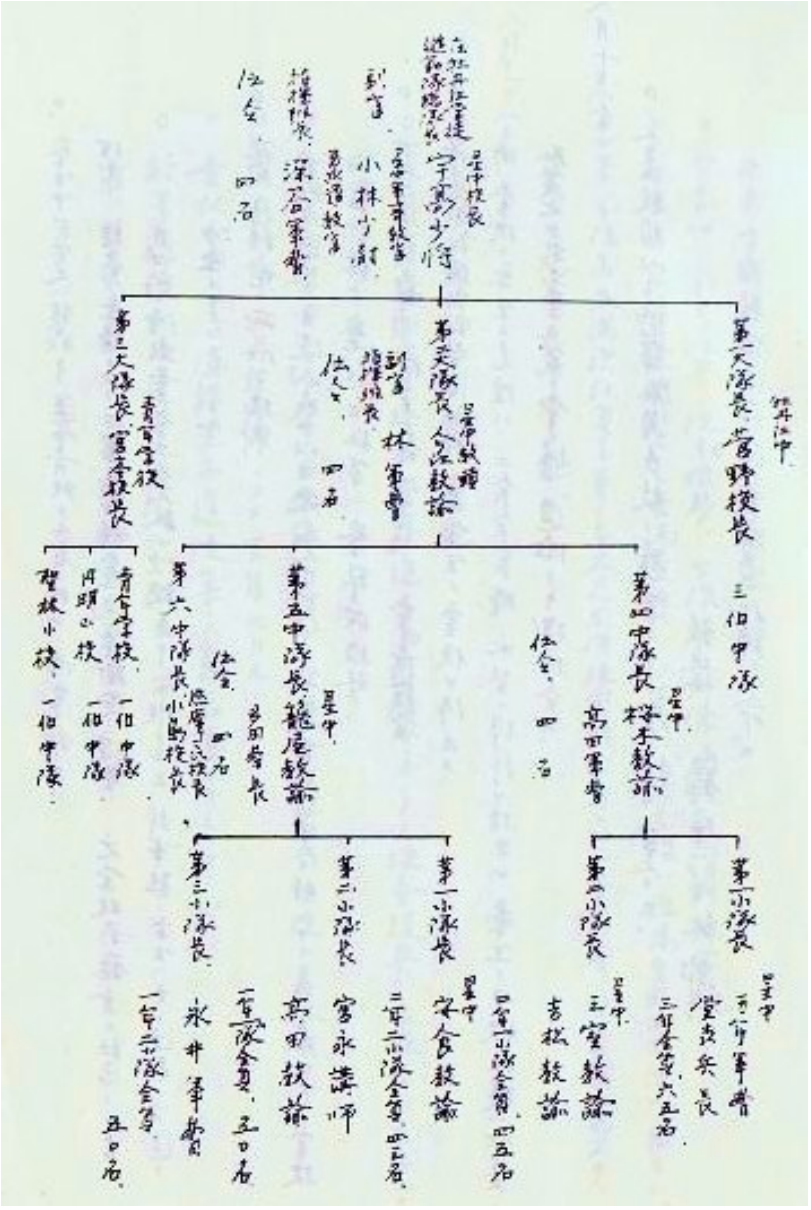
朝礼の後、武道館で職員、生徒全員による学徒遊撃隊が結成され血盟式が行われているのだが、これも全く記憶にない。

学徒遊動隊は、ソ連侵攻前から市内の牡

臨坂中尉（英語）、藤清少尉（生物・剣道）　昭和20年6月1日付原隊復帰送別記念
平高校長（退役陸軍少将）前列中央、永井軍曹（国語）左列前から3人目。生徒は4年生（1期生）

丹江中学、青年学校、国民学校三校によって連繋をはかり編成されることになっていたようだ。

去る六月玉砕した沖縄では、中学校や師範学校の生徒が鉄血勤皇隊などを結成して米軍と戦ったことを範としたのだろうか。



血盟式の訓示は「学校総隊長ノモト　兇敵撃摧（きょうてきげきすい）　ノ熱願ニ燃エ、勇躍戦列ニ参ジ、市民援護、学園死守ノ重責完遂ニ決死敢闘ヲ宣誓ス」（『ソ聯参戦侵襲戦争終結ニ伴フ学校措置報告書』（教頭今江勇也作成、昭和二十年九月十日）

そのころには、早暁の機甲班の先輩との威勢のよい話はどうも危うげで、戦局はそう安易な状況にないらしいという雰囲気が伝わり、つかみようのない不安が頭をかすめた。

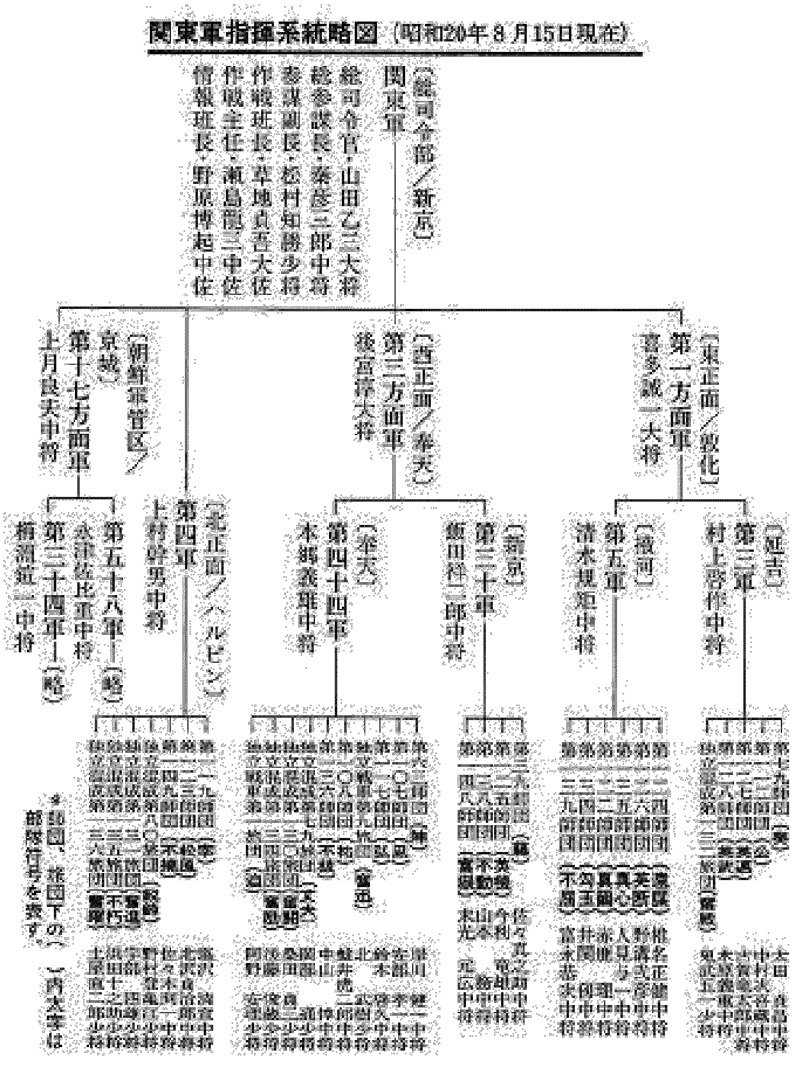
それでも、ソ連と戦争が始まっているという実感はわいてこなかった。〝無敵関東軍〟が健在である限り大丈夫だろうという楽観的な気持ちが働いていた。

当時の関東軍作戦参謀草地大佐の回想録によると、関東軍としては「兵力転用企図秘匿要領」などを

作製、すでに関東軍の精鋭部隊は南方のフィリピン方面や本土決戦に備え転出し、武器、弾薬も底をつき、戦力の抽出転用を極力秘匿し、張り子の虎を装った。関東軍はすでに昔日の精強関東軍ではなかった。

それでも満洲在住の邦人の根こそぎ動員で穴を埋め、兵力は約七十万人あり、最後は全員玉砕のハラだった。（中略）

　関東軍部隊の内地転用に関して、数万にのぼる兵員が移動しているのを目撃した



『ソ連が満洲に侵攻した夏』（文藝春秋）より

という人は少ない。軍はすべてこれを夜間に実施したからだ。敵性人につかまれたとしても、その全貌を把握することはできなかったであろう。『関東軍作戦参謀　草地貞吾回想録』（芙蓉書房出版）

これに対し、全国捕虜抑留者協会長の斎藤六郎氏は、南方戦線は敗退を重ね、兵力の消耗が甚だしかった。その補充兵力として昭和十九年初頭から、何十万の精鋭部隊を

関東軍から引き抜き転進させていた。武装した軍隊の移動は人眼から隠し通せるものではない。しかも敵性中国人の衆人環視のもとにおいておや。（中略）

これら根こそぎ動員による招集兵は、軍事訓練を受けることもなく、戦車、砲兵、航空部隊の重装備は皆無に近く、小銃すら充分に行きわたらない未教育の兵の集団に過ぎなかった。『シベリアの挽歌　全抑協会長の手記』（全国捕虜抑留者協会長 斎藤六郎著）

草地元大佐は戦力の内地転用を極力秘匿したというが、わが校でも四月に入学した一年生百二十名のうち十四人が五月から六月にかけて岩国中、唐津中、飯田中など内地の学校に転校している。このことは戦後知ったことで、部隊の移動が外部に洩れるのを防ぐため、学校内でも、ごく一部の関係者以外には内密にしていたのだろう。

満洲では転校は日常茶飯事だったし、入学して日が浅かったこともあるかもしれない。『機雷』で直木賞を受賞した故光岡明氏もその中の一人だが、在籍期間はわずか一週間だったという。

草地元大佐は、兵員の移動は夜間に実施したから敵には洩れなかっただろうと述べているが、従順な日本人の目はともかく、この土地に根を張る大勢の中国人の目を欺くことができたかどうか。

血盟式の後か、午後になってからだったか、

「市内に自宅または親戚のある者、および近郊より通学可能な者は、即刻帰宅してよいことになった。また親戚と連絡可能な者は親戚と行動をともにするか、学校と運命をともにするかよく相談してくるように。家が遠方の者や、親や親族と連絡がとれない者は別命あるまで待機する。残った生徒は全員、校長が引率して最善の方法を講じる」と通達があった。

四月に入寮して以来、慢性的な空腹に悩み、ホームシックを募らせていた私には思いがけない朗報だった。ソ連参戦のことなど、すっかり頭の中から吹き飛んでいた。学校が終わると一目散に牡丹江駅から二つ目の 海林（ハイリン） に向かった。

楳本捨三著『関東軍総司令部』（経済往来社）よると、日米の戦況が香しくなくなってきた昭和十八年、関東軍の兵力を転用。　まず、チチハルの第二方面軍司令部が引き抜かれ、つづいて間島に所在した第二軍司令部、精強機械化をもってなる四平の機甲軍司令部が抽出された。これらは関東軍が精魂をこめて鍛え上げた精鋭であった。しかもできる限り優秀な編成に装備も最高最新のものを携行させた。抽出部隊は次の通り。

同年十一月。戦車連隊一。独立工兵連隊一。第三、第四独立守備隊。数個の兵站警備隊。独立工兵大隊四。高射砲大隊二。

昭和十九年二月。錦州の第二十七師団。チチハルの第十四師団。遼陽の第二十九師団。第二工兵司令部。戦車連隊二。鉄道連隊二。高射砲連隊一。独立工兵大隊三。独立自動車大隊六。独立輜重兵大隊二。鉄道材料廠一。架橋材料中隊四。迫撃大隊二。独立野砲兵大隊二。野戦高射砲大隊一。有線、無線部隊若干。第一、第二、第三、第四、第五、第六、第七派遣隊（在満各師団より歩兵団司令部、歩兵三大隊、砲兵一大隊、工兵一中隊を抽出）。独立自動車中隊三。

同年三月。独立工兵連隊一。独立山砲兵連隊一。戦車連隊一。独立重砲兵大隊一、移動修理班若干、兵站病院若干、患者輸送小隊若干。

同年四月。第九、第十派遣隊、海上機動第二旅団。

同年五月。野戦重砲兵連隊一、通信部隊若干。

同年六月。牡丹江の第九師団、公主嶺の第六十八旅団、ハルピンの第二十八師団、戦車連隊一、野戦重砲兵連隊一、独立速射砲大隊四。

同年七月。林口の第二十四師団、佳木斯の第十師団、孫呉の第一師団、綏陽の第八師団、勃利の戦車第二師団、独立速射砲連隊一、野戦重砲兵連隊二、独立混成第二十五連隊、独立混成第二十六連隊、電信連隊一、独立重砲兵大隊一、独立工兵大隊一、独立速射砲中隊六、兵站勤務中隊、独立速射砲中隊四、通信部隊若干、兵站病院若干。

同年八月。第一野戦輸送司令部、第五砲兵司令部、独立戦車大隊一、独立自動車大隊数個、独立輜重兵大隊数個、野戦作井中隊四。

同年十月。ハイラルの第二十三師団、第六野戦輸送司令部、有線中隊若干。

同年十一月。独立野砲兵大隊一、勤務中隊十二。

同年十二月。東寧の第十二師団。

昭和二十年一月。佳木斯の第七十一師団、ハイラルの第六軍司令部。

同年二月。電信連隊一。

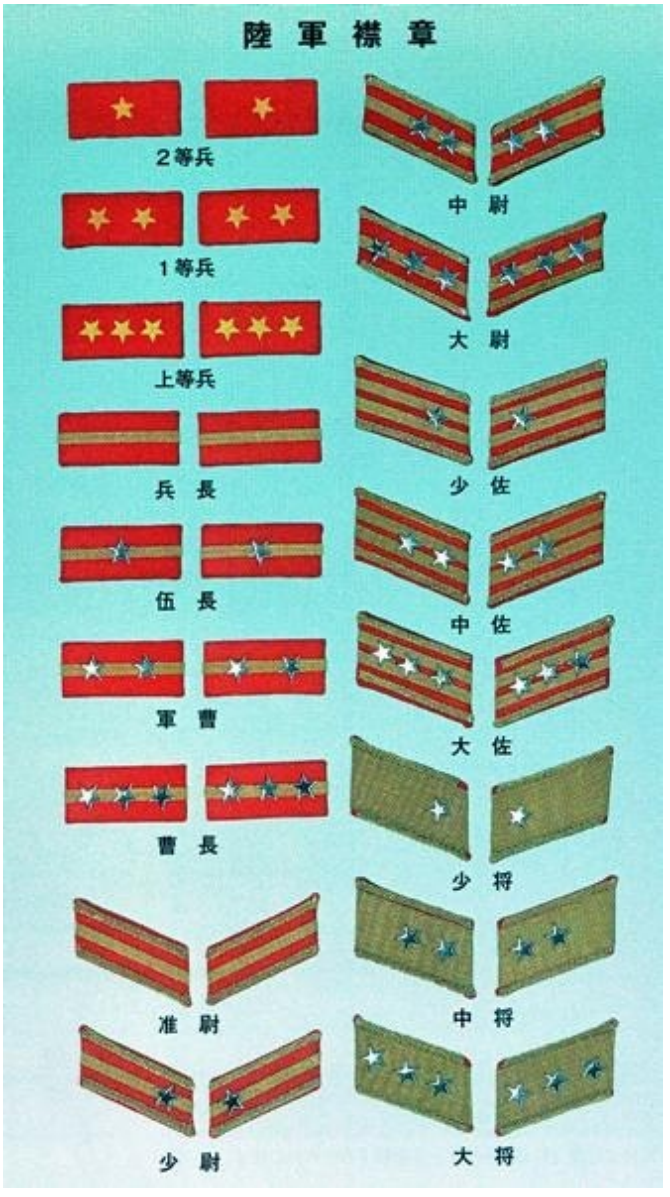
同年三月。寧安の戦車第一師団、東安の第十一師団、鶏寧第二十五師団、ハルピンの第百二十一師団、東満の第百十一師団、東満の第百二十師団、山神省第五十七師団、第一砲兵司令部、第七砲兵司令部、第八砲兵司令部、第三工兵司令部、第七野戦輸送司令部、野戦重砲兵連隊二、電信連隊四、独立工兵連隊一、砲兵情報隊三、迫撃大隊一、独立自動車大隊二、独立重砲兵大隊二、独立臼砲大隊一、牽引車中隊二、兵站病院若干。

完全装備の精強歩兵師団、機甲師団それに準ずるもの二十数個におよび、満洲に最重要な戦車師団、連隊など根こそぎ抽出されたのである。これらの多くが、ニューギニアに、パラオ、ペリュリュー島、フィリピン、沖縄において善戦敢闘したことは戦史にあきらかなところである。

右は地上部隊の抽出転用であるが、これを航空部隊にみることとしよう。

昭和十九年二月。第十二飛行団、第五飛行団、第六、第七直協飛行隊、飛行第九戦隊、飛行第三十二戦隊、飛行第八十五戦隊、飛行場大隊二、独立飛行中隊二。

同年三年。第十九航空地区司令部、飛行場大隊。
同年四月。第二飛行団司令部、第十三航空地区司令部、第二十九航空地区司令部、飛行第六戦隊、飛行第四十八戦隊、飛行場大隊九、航空特殊通信隊二。
同年五月。第二飛行師団司令部、第二航空通信司令部、第六、第十航空地区司令部、第四飛行師団司令部、第五飛行団、第六飛行団、第十飛行団、第十三飛行団、戦闘戦隊三、襲撃戦隊三、飛行第三十二戦隊、飛行第七十七戦隊、第六航空通信連隊、司偵戦隊二、飛行場大隊十、対空無線隊三、航空修理廠、第七野戦航空補給廠。
同年七月。第四十四、第四十五航空地区司令部、飛行場大隊十、航空特種通信隊、第十対空無線隊。
同年十月。第四十九航空地区司令部、第一独立飛行隊、飛行場大隊。
同年十一月。飛行第二十八戦隊、飛行第七十戦隊、飛行場大隊一、独立飛行中隊二。
昭和二十年一月。第五十航空地区司令部、飛行場大隊三。
同年二月。第八野戦航空修理廠。
同年三月。第二飛行団司令部、飛行第六戦隊、飛行第九戦隊、飛行第四十八戦隊、独立飛行第四十一中隊、第一独立飛行小隊。
以上、関東軍総司令部の戦力は骨抜きの名のみの総軍となっていたのである。



次に、満洲で現地召集をうけた柳田昌男氏の手記『ムーリン河　ソ満国境・一等兵の記録』（柳田昌男著、ミネルヴァ書房、昭和四十五年五月発行）から、ソ連軍侵攻第一日目の東部戦線の状況を抜き書きする。
著者の柳田氏は昭和十五年、京都帝国大学卒業、満洲中央銀行に入行。昭和十九年三月在満召集され満洲虎林（コリン）第一五〇部隊に入隊。すでに三十歳を超えた妻帯者だった。昭和二十二年シベリヤより復員、翌二十三年、大蔵省勤務。

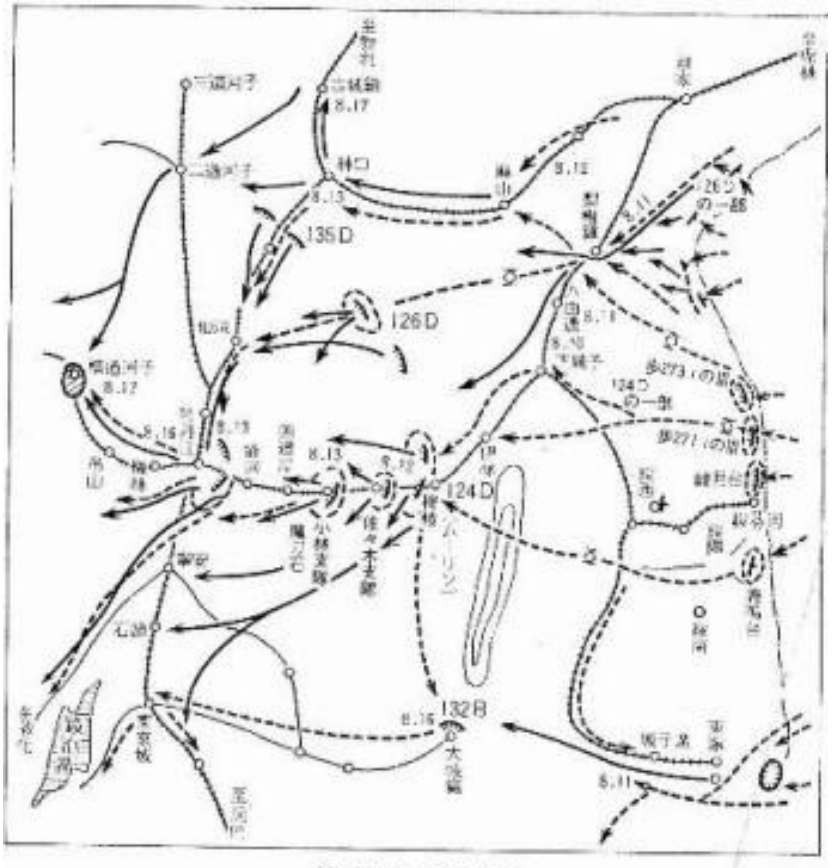
「ソ満国境・一等兵の記録」より

私の勤務する第五軍参謀部所属 綏陽（すいよう） 気象班は、東満洲国境に近い綏陽第一二四師団司令部構内にある。
八月八日、夕刻前より降っていた雨は雷鳴をまじえ、はげしくなる。
定時観測の午後十時になったので、私は雨外被を着て 露場（ろじょう） （気象関係の観測機器の設置場所）に出る。
国境の綏芬河（スイフンガ）街の方向に、しきりに雷光がする。東の国境方面の空を眺めていると、雷鳴にしては変わった「ドン」という音がきこえ、心なしか空も薄赤く感じられ、何か異変を感じ胸騒ぎがした

ので、いそいで下におり、坪井兵長に「国境のほうで大砲らしい音がする」と報告したところ、「馬鹿を言うな、雷のまちがいだ」と耳もかしてくれない。

やはり気になるのでまた屋上にのぼり、国境方面をじっと観望する。

まちがいなく大砲の音だとわかると、情けないことには足がふるえて、おりる梯子の階段をふみはずして落ちてしまう。すぐに兵長に「綏芬河方面で大砲の音がしている。間違いありません」と報告すると、私のただならぬ顔色をみて、急いで外に出たが、まもなく大きな声で「砲声だ、戦争だ」と叫びながら入ってくる。現役五年兵で、しばしばわれわれに実戦談を話してくれる経験者である兵長が、戦争と判断したのであるからもう間違いない。

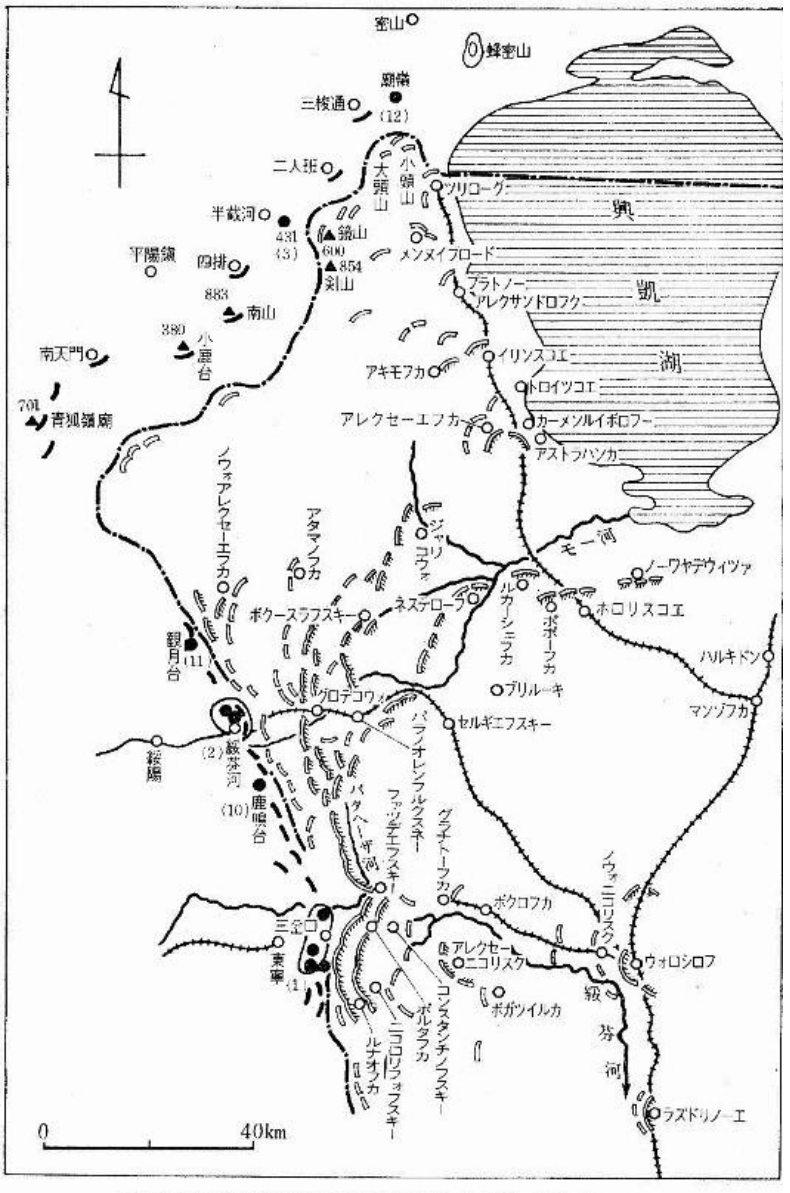


牡丹江正面戦況図

さあ大変、班内がにわかに騒然となる。武器としては小銃と　手榴弾（しゅりゅうだん）　だけしかない。ともかく一応武装はするが、それから何をしてよいのかわからない。ある者は椅子に腰かけ、他の者は寝台に坐して勝手な憶測話をして気分をまぎらすのである。こんな場合、黙っていては気分が落ちつかないので、誰彼の区別なくお互いに話しあう。

班長の山藤軍曹は、第五軍司令部と電話で話している。それによると「ソ連軍の攻撃は単なる国境の紛争か、あるいは全面戦争かは意図不明、気象班はしばらく現在地で状況を監視し、その後の動向を逐次報告せよ」との指示があったようである。

たしかな国際状勢の動きを知らない私たち兵隊は、このときまだ危機が迫っているとも露知らず、相変わらず勝手な景気のよい話をつづけていた。みな興奮して午後十一時はとっくにすぎたが誰も寝ない。



東部正面陣地概要図（防衛庁戦史研究室資料より）

夜半過ぎ、国境の監視所、鹿鳴台（ろくめいだい）と観月台（かんげつだい）に分遣されている気象班員から、「敵の攻撃を受けて応戦中」との連絡があり、班長がこれを受けて、「機器を破壊して綏陽まで後退せよ」と命令を伝え、なおも話を続けようとする途中、電話が切れたので事態がいよいよ急迫してきたことがわかる。

翌八月九日、午前九時頃、観月台に分遣されていた木山伍長が帰って来た。彼は一夜で見違えるような姿に変わっている。班長以下みなそのまわりに集まり彼の話をきく。「八日夜十時すぎ、不意に敵の砲撃を受けた。かねて敵は測距（そくきょ）観測していたのかかなり正確に集中砲火を浴びせてきた。なにぶん味方の火器は軽機関銃と小銃、これでは勝負にならない。全員善戦奮闘したが、しだいに敵砲火に圧迫され涙をのんで後退した。向地視察班の大半はおそらく戦死したものと思う」と興奮した面持で報告する。汗とほこりにまみれた頬に涙が一すじ二すじ流れている。

班長は私たちのほうにふりむき「鹿鳴台（ろくめいだい）のほうは通信途絶している。呼び出しても応答がない。誰か連絡に行け」という。坪井兵長が「そんなことしても無駄だ。おそらく東寧（とうねい）方面に脱出してい

るだろう。いま連絡兵を出すことは状況がはっきりしないからかえって危険である。やめて欲しい」と強硬に主張するので、班長も兵長の言に折れて中止することになった。一瞬ほっとした空気が班内にただよう。私は坪井兵長のほうに向かって目で感謝の意を示すが、彼は知らん顔をしている。おかしなヤツであるが、重大なときに五年兵の貫禄を示してくれるので時によっては有難い存在である。

綏陽街

そのうち、かすかに爆音がきこえ、やがて轟音となり、敵爆撃機が編隊をなして続々と牡丹江方面へ向かって飛んでいく。高度は千メートルもない。爆弾一つ落とすでなく、完全になめきった様子で悠々と飛んでいく。

すでに敵は、その巧妙な情報網により、綏陽街にはたいした兵力・火力がないことを知っての行動だと思うと、なおさら残念である。

午後二時ごろ、遂に山藤班長より「露場の機器類をいっさい破壊せよ」との命令がでる。

破壊が終わって班内にもどり休憩しているところへ、本部から連絡将校が飛び込んできて「午後三時に最後のトラックがでる。気象班も、これに乗って牡丹江市へ後退せよ」と命令する。

トラックのところにいくと、すでに顔見知りの炊事班の兵隊らをふくめ十人ばかりが乗車しており、いずれも相当の私物をもちこみ、まるで物見遊山のように陽気にはしゃいでいる。

綏芬河独立守備隊

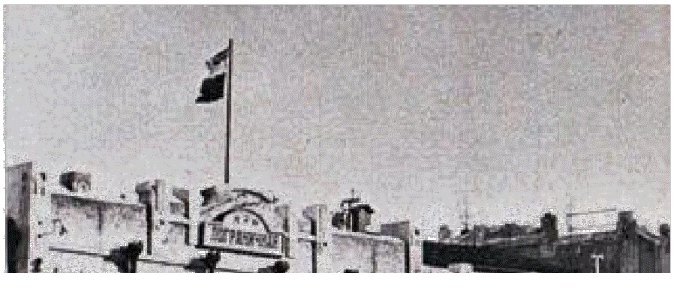
山藤班長はじめ気象班全員乗車、もちろん完全武装しているが私物の荷物はなく、他の班の兵隊に比べてまことに簡単な格好である。

トラックは二台、一路綏陽駅に向かって進む。時間にすれば数分の距離である。班長は「もし汽車が運行しているならば、気象班は汽車で行くつもりだ」と知らせてくれる。

しかし駅で見た光景は意外な場面である。構内に入りプラットホームに進むと、そこには満鉄社旗を中心にして、日本人をはじめ*満人を含む駅職員約二十人ばかりが満鉄社歌を整然と合唱していた。やがて合唱が終わると、万歳三唱して各人が駅長の指示に従って職場に散っていく。

駅員に状況をきくと「線路はムーリン地区で爆破されて運航していない。正午ごろ、多数の日本人を乗せて出発した汽車が果たして無事に牡丹江市につくかどうかわからない」と心細いことをいう。

『1億人の昭和史 日本植民地史<2>満州』(毎日新聞社)



国境の綏芬河からは早朝一本の汽車が到着したのみで、その後はつかないし、また通信も駄目とのことである。

将校や班長は日系職員に対して「もうこうなったらやむを得ない。われわれのトラックで一緒に後退しよう」としきりに勧告しているが、彼らは「任務の

綏芬河の別名ポグラニチナヤは　ロシア語で国境の意で
駅舎にはソ満国旗　北鉄浜綏線とウスリー鉄道の終着駅

ためここを死守する」といって頑として聞き入れないのである。

私はたまたまそこにいた年齢十七、八位の少年に「兵隊さんと一緒に牡丹江市に行こう」と話かけたところ 赤 銅(しゃくどう)の顔に笑顔を浮かべて「線路が復旧したらまた汽車が通るからそれまでがんばる」と健気な返事をする。

ソ連軍の戦車

炊事班の上等兵がこの少年に羊かんを贈ると、彼は礼儀正しく敬礼して、喜んで受け取るその笑顔のあどけなさ、一同思わずニッコリする。この少年の名前も故郷もきき漏らしたことは今もって心残りである。

おりしも機銃の音が、旧司令部の方角でしたので、全員あわててトラックに乗車、直ちに速度を上げて西走する。

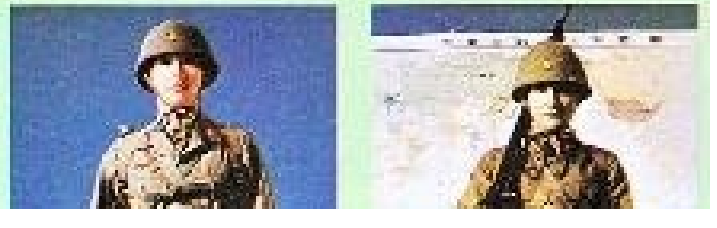
ふと砲声に驚いて振りかえると、敵の戦車が満洲中央銀行 綏陽(すいよう) 支店の前を進んでいる。直線距離にして千メートル。大きい黒い鉄塊から長い砲身が無気味に突き出ているのが見える。その砲身の先端から真赤な火焔、つづいて砲声、どうやら敵は軍酒保の建物を狙っているらしい。

かねて敵には大きな戦車のあることはきいていたが、今見るそれは、たしかに私たちが見馴れてきた関東軍の戦車よりはるかに大きい。もし私たちのトラックがあの大砲の攻撃をうけたなら、それこそ一発で全員お陀仏というところだが、幸いにもこのトラックには気づいていないらしい。

トラックはまもなく峠の頂上を越し、大きく右折して敵の視野からかくれ、虎口を脱したのでやれやれと安堵し、私も思わず軍帽で顔の汗を拭う。

廻りくねった坂道をどんどんと下っていく。道の両側に二人・三人とひとかたまりになった傷病兵が、ある者は看護婦に手をとられ、他のものは杖をたよりに、 綏西(すいせい) 方面を目指してとぼとぼと歩いている。「おい！　とめてくれ」「乗せてくれ」という悲痛な叫びを幾度か耳にしたが、車は右に左に、ハンドルをきって進んで行く。車上の将校も下士官も皆素知らぬ顔をしている。

まもなく右手はるかに綏西の歩兵部隊兵舎がみえる地点までくると、驚いたことには、その兵舎から煙りが昇り燃えているのである。司令部を出発するとき将校たちは、この部隊にも立ち寄ろうかと話しをしていたことを耳にしたが、この状態ではとてもでないがこれは無理。



トラックは三叉路で止まる。どこの部隊か知らないが、炎天下の行軍に疲れはてて、声をだす元気もなく、銃を肩に黙々と歩いている。車上から「元気を出せ」「がんばれ」という声もするが

彼らにはなんとも反響がない。その気持は同じ兵隊として痛いほどよくわかるのであるから、私はどうしてもそんな空々しい励ましの言葉をかけることができない。おそらく彼らはここにくるまで、途中何度か先行のトラックに乗車を頼んだことだろう。しかし、そのいずれもが空しく、兵隊としてのあきらめと忍従が、かく沈黙に向かわしめたのだろう。

突然、綏西兵舎の方向にあたって砲声がする。兵舎の北方数百メートルのところを敵戦車が砲火を吐いて進んでいるではないか。

目標は当然綏西の兵舎である。この部隊も綏陽と同じく東北地方出身の人が多い。戦車はしきりに砲声と閃光をくりかえしている。しかもその北方の山麓にはなお多数の敵戦車がいるのが見える。少なくとも二十台以上はいる。あんなところに間道があったのかと驚く。兵舎の火災はいよいよ大きく拡がっていく。どうやら兵舎には日本軍がいて抵抗しているらしい。飛行機なく、戦車なく、大砲もおそらくないだろう。重機関銃がせいぜい最高の武器だと思うが、小銃や軽機ではとうてい守備は無理というもの、しかしそれを承知で皇軍の名誉にかけて苦しい戦闘をしている友軍を思うと、実に胸がいたくなる。敵の砲火はなおもつづき、彼我の距離は接近し、もう二、三百メートルもない。「だめだ、畜生」というううめき声が、このトラック上のあちこちでする。

『満州国の最期』(新人物往来社)

砂煙をあげながら続々と進撃するソビエト戦車部隊

*【満人・満語・満人街】当時の日本人は満洲民族・漢民族をひっくるめて満人と呼んでいた。満洲は実質的には漢民族の国。清朝以来、この地方を支配した純粋な満洲民族は全体の十パーセントに満たない。日本人は彼らの言葉を満語。域内の中国人商店街を満人街と呼んだ。

同年三年。第十九航空地区司令部、飛行場大隊。
同年四月。第二飛行団司令部、第十三航空地区司令部、第二十九航空地区司令部、飛行第六戦隊、飛行第四十八戦隊、飛行場大隊九、航空特殊通信隊二。
同年五月。第二飛行師団司令部、第二航空通信司令部、第六、第十航空地区司令部、第四飛行師団司令部、第五飛行団、第六飛行団、第十飛行団、第十三飛行団、戦闘戦隊三、襲撃戦隊三、飛行第三十二戦隊、飛行第七十七戦隊、第六航空通信連隊、司偵戦隊二、飛行場大隊十、対空無線隊三、航空修理廠、第七野戦航空補給廠。
同年七月。第四十四、第四十五航空地区司令部、飛行場大隊十、航空特種通信隊、第十対空無線隊。
同年十月。第四十九航空地区司令部、第一独立飛行隊、飛行場大隊。
同年十一月。飛行第二十八戦隊、飛行第七十戦隊、飛行場大隊一、独立飛行中隊二。
昭和二十年一月。第五十航空地区司令部、飛行場大隊三。
同年二月。第八野戦航空修理廠。
同年三月。第二飛行団司令部、飛行第六戦隊、飛行第九戦隊、飛行第四十八戦隊、独立飛行第四十一中隊、第一独立飛行小隊。
以上、関東軍総司令部の戦力は骨抜きの名のみの総軍となっていたのである。